バングラデシュ短信 ： 2012年 11月下旬

28. DEC. 12

小島正憲

ダッカ市内で、縫製工場の大火事 死者115人

①火事の真相

11／24（土）の夕方6時50分ごろ、バングラデシュのダッカ市内アシュリア工業ベルト地帯にあるタズリーン・ファッション・リミテッドの8階建ての工場で火事が発生、少なくとも109人が死亡した。火は11時間ほど燃え続け、日曜日の午後5時55分に鎮火した。バングラデシュ衣料メーカーおよび輸出協会は死者の合計数を115人と発表した。少なくとも55の焼け焦げた遺体がダッカメディカルカレッジの死体公示所に安置され、遺体から DNA サンプルが昨日採集された。身元不明の遺体は首都のジュリアン墓地に埋葬されることになっている。

なお、原因については、現在も調査中であるが、1階の電気配線からの出火ではないかと見られている。

消防隊オフィサーのファルハドゥザマンは、「8階建ての工場の三つの階から合計100人の焼死体が見つかった。そのうち69体が4階、21体が5階、10体が6階から見つかった」と語った。また消防隊関係者は、「焼け方がひどく身元を判明するのは困難である。遺体は隣のニスチンタプール小学校のグラウンドに安置されているが、まだ数名の人々が行方不明のため死者の数は増えるだろう」と、話した。消防士や目撃者の話しによれば、炎から逃げようと8階建てのタズリーン・ファッションの各階から飛び降りて死亡した人も多いという。工場の代表取締役でロワール・ホセインは、「事故が起きたとき約300人の労働者が工場の中にいた」と語ったが、実際には火災が起きたとき約1,800人の人々が工場内で働いていた。

鎮火後、被害者の家族たちは、瓦礫から死体を引き出している救助現場から失われた身内を探しながら、「もし現場の責任者が6時45分に鳴った最初の警報後、すぐに労働者を避難させていたらほとんどの人が死なずにすんだであろう」と語った。生存者の一人は、「工場長を始めとする現場責任者たちは、労働者が持ち場を離れるのを妨げただけではなく、それぞれのゲートに鍵を掛けた。工場1階に通じる階段3つのうち二つに鍵が掛かっていた」と言った。消防・民間防衛（活動とメンテナンス）のディレクター、マジ・マハマッド・マハブブは、「消防士は階段のゲートには鍵が掛かっており、救出作業をする際、南京錠を壊して開けなくてはならなかった」と語った。炎から逃げるために労働者たちは他のゲートに殺到した。逃げる途中、現場責任者に労働者たちは、「仕事に戻るように」と言われた。それを聞いた労働者たちは、火事は小規模のものですぐに消えるだろうと思い、作業現場に戻った者もいたという。

しかし火事は大規模なものだった。炎は各階に燃え広がった。煙が8階建てビルの隅々まで充満し、電気が消えた。炎は一階に置いてあった生地や糸に急速に燃え広がり、労働者たちをビルの中に閉じ込めてしまった。炎から逃れるために多くの人たちはビルから飛び降りて死亡したが、ビルに取り付けてあった足場につかまりながら下りて助かった人たちもいる。

一方、消防隊は交通渋滞に阻まれ、現場に到着するのに1時間半かかった。ダッカ市内のから18か所以上の消防団たちが駆けつけ、11時間以上掛かって火を消し止めた。また工場の防火安全システムは基準以下だった。ビルには1階への唯一の出口に通じる階段は3か所しかなかったのだ。工場の持ち主トゥバ・グループの代表取締役デルワール・ホセインは、「十分な火災安全対策が採られていたが、事故が起きたとき労働者たちがそれらを使いこなせなかった」と言い、「避難訓練を数日前に行ったばかりだ」とも語った。

トゥバ・グループのウエブ・サイトには、この工場は、ウォルマートの検査によって、2011年5月に「ハイリスク工場」であると指摘された文書がアップされた。その中には避難路が荷物でふさがれてしまっていること、非常口に鍵がかかっていることなどの指摘があり、2年間以内に、このような状態が改善されない場合には、少なくともその後1年間はその工場に発注禁止措置をとるとも書かれていた。しかしながら実際にはこの指摘は改善されておらず、工場の踊り場や廊下に積み重ねられた生地と糸に火がつき避難路を死の落とし穴へと変えてしまったのである。

多くの労働者は、窓の金属バーを壊して隣のビルへ避難した。そのビルの持ち主マハムド・アリ・シクダールは、「二つの建物をつなぐために竹の板や鉄板を渡した。それをつたって400人以上の人々が彼のビルから避難してきた」と言った。何十人と言う人々が、火が1階に広がった後、火の手を消そうとした。「火の手を沈めようとしたが、燃えやすい生地や糸にどんどん火が広がり、われわれは結局あきらめた」、工場の1階で働いていたモミヌール・ラハマンは言った。「1週間前に避難訓練をしたばかりだった。そして15人は水や消火器を使って火を消す訓練を受けていた。しかしこのときは何をしてもだめだった。」と言った。「数分で停電になり、廊下や階段を伝わって炎は燃え広がった。そしてすべての出口をふさいでしまったのだ」と、モミヌールは続けた。火の手が発見されるよりもっと前に火がついていたのではないかと思われている。また生存者の一人は、警報機の音を隠すために、責任者が大きな音楽を流したとも話している。

5階で働いていた生存者スエド・アシュラフール・ザマン・カッロルは、「生産責任者デュラルとランジュと、工場責任者ラッザックは、警報が鳴った後労働者たちが避難するのを妨げた」と言った。「もし工場から離れることを許可していればこのような異常なほどの数の死者が出ることはなかっただろう」と4階の窓を壊して隣のビルに逃げて助かったカッロルは語った。もう一人の生存者マハブブ・アラムは「工場関係者は我々を、自由行動を否定された囚人のように扱った」と、話している。

②各分野での事後の対応

衣料工場での火災での死亡事故をストップさせる方法の話し合いが、市内のプロトム・アローの事務所で行われた。その場で、カルモイビ・ナリ（女性権利を確証する機構）の最初の会長シリン・アクターは、「この工場のオーナーは直ちに現場責任者など彼の雇用人が犯した罪のために逮捕されるべきである」と言った。またサッミリタ・ガーメンツ・スラミク機構（衣料労働者のプラットフォーム）会長のナズマ・アクターは、「彼の罪を書類に示さなければ、労働争議を鎮めるのは難しくなるであろう」と語った。バングラデシュで繊維製品を委託製造している多くの海外の既製服小売業者の現地代表も、「バングラデシュの企業は安い労働賃金を利用して自分のポケットを肥やし、労働者を危険にさらしてきた」と言った。消防隊および民間自衛（活動とメンテナンス）のディレクター、ムハマッド・マハブブ少佐は、「階段が通じている1階に置いてあった衣料の材料はとても燃えやすく、高熱を発し、濃い煙を立ち上げた。それで労働者たちは閉じ込められ窒息死してしまったのだ」と語った。

労働雇用省の書記官責任者であるミカイル・シパールは、「アパレル工場は、労働者を強制的に扱い、労働法やそれに関する安全規則に反している」と言った。工場での安全な労働環境を確実にする責任のある官庁の工場監察局は、「法律では314のポジションを要求しているのに、現在実際には184しかない。ダッカ市内全体でも、たった4人しか監察員がいない。有効総人員を増そうと繰り返し試みているが結果がまだ現れていない」と、語った。ニットウエアメーカー及び輸出協会（BKMEA）の会長セリム・オスマンは、「アパレル工場のオーナーたちに、部門の安定した成長のために労働法や環境法を遵守すること。それぞれの工場で電気分布ボード、スイッチ・ボード、サーキット、消火器、熱感知器を再点検すること。反対側のゲートも含めて工場のメインゲートをいつも開けておくこと、そして通り道には障害物を置かないこと、また工場付近では禁煙にするように」と、呼びかけた。

数日後、15の消防サービスチームが、アシュリア工業ベルト地帯の73の工場を点検した結果、3分の1の工場が十分な消火機能と労働者の安全機能を備えていないことが判明した。非常口のない工場、十分な安全機能のない工場が摘発された。消火機能のない工場はひとつもなかったが、多くの工場の消化器が使用有効期間を大幅にオーバーしており、火災の際、十分に機能するものではなかった。また消火器が空になっていても補充されていない工場が多くあった。労働者やスタッフに対して毎月の避難訓練を行っていない工場が多かった。消防サービス部長のアブドゥス・サラムは、彼の直属チームにザラボの5つ工場を点検させた結果、そのうちの2つの工場（シャープ染色・プリンティング工場会社、ロレスク・ファッション・リミテッド）が、十分な消火器を備えていないことがわかった。サラムはこれらの工場に、ファイア・サービス・ライセンスをキャンセルすると勧告した。

アシュリアの産業警察の副部長モクタール・ホセインは、「われわれも消火チームに同行し、警察署の落ち度がなかったかどうかを調べた」と言った。消防サービス部長のアブドゥス・サラムは、ファイア・ライセンスの更新をチェックするために、すべての工場を検査し、「ファイア・ライセンスを更新するとき、すべての工場を確実に調査するには、工場の数に比べて、調査官の人数がとても少ないので、現時点では不可能である」と、語った。タズリーン・ファッションでの大火災から5日経って、衣料メーカーは RMG 生産ユニットでの防火装置をグレードアップする強力な委員会を結成することを決定した。

バングラデシュ衣料メーカーおよび輸出協会（BGMEA）の副会長のディクールラハマンは、新聞に死亡した被害者の家族に10万タカずつ手渡すと発表した。BGMEA の会長セリム・オスマンは、ナラヤンゴンジの本部でイスラム教に則り祈りをささげ、施しをした。工場主のデルワール・ホセインが、「火が8階建ての工場を飲み込み始める15分前に工場を訪れていた。普通工場主が現れるときは、工場責任者から安全管理を徹底し労働者規則を守り、きちんとしておくよう

に言われているが、その日は前触れもなく訪れ、知らないうちに去っていた」と、工場責任者の一人は語っている。

③火事の国際的影響

輸出業者や分析者たちは、「アシュリアのタズリーン・ファッションで起きた火災は、中国の後に衣料の主なアイテムの輸入先としてバングラデシュをターゲットにしている外国のバイヤーたちに、マイナスシグナルを送るであろう。悲劇は国のもっとも大切な部門を襲った。有名なアパレル・バイヤーたちは、中国での賃金高騰のためバングラデシュや他のアジアの国々に仕入れ先を移そうとしていた矢先のことだった。有名なバイヤーの中には、既に彼らのために衣服を作っている労働者たちのことを心配し始めたものもいる。大火災が起きたタズリーン・ファッションのオーナーは、外国のバイヤーたちが離れてしまうのではないかと恐れている」と、語っている。ウォルマート・ストアやターゲット・コープを顧客に持つリー・アンド・ファングは、「私の会社のために衣料アイテムを作っていたタズリーン・ファッションのオーナーに、今、連絡を取り詳細について聞き取り調査をしているところだ」と語った。反面、タズリーン・ファッションを所有するトゥバ・グループの代表取締役デルワール・ホセインは、彼のバイヤーの一人であるリー・アンド・フングの関係者が、「哀悼の意を表しに来た」と言った。ブルームバーグによると、香港を本拠にしている発注者は、独自に捜査をすると言った。

既製服製造業はバングラデシュの国内総生産の10％以上に上り、国の輸出、特にアメリカやヨーロッパ市場に向けての約80％を占めている。輸出業者や分析家たちは、「外国のバイヤーたちは火事やその他の労働者問題にとても敏感である。彼らは100人以上も死者を出した火災の後では、バングラデシュの工場への注文をすることに躊躇するだろう。多くのバイヤーたちがバングラデシュを、彼らの外注先のリストから外したり、ベトナムやコロンビアに変えることも考えるだろう」と言っている。トゥバ・グループのウェブに貼り付けられた投稿には、2011年5月、タズリーン・ファッションが世界最大の小売業者であるウォルマートの倫理協定部門から、「ハイリスク工場」と見なされていたことを暴露している。

以上